

国産材太材活用へ

杉芯去り平角本格化

SSDプロジェクト



球磨プレカットで機械等級構造用製材のJAS格付けをする

側材活用で造作メーカーと連携強く

紅中（大阪市、中村晃輔社長）が取り組む国産材品質表示推進協議会（SSDプロジェクト）では、機械等級区分構造用製材の供給体制整備が進み、地場ビルダーと連携しての新設住宅向け需要開拓、また非住宅木造建築物向け提案営業も本格化している。今後の需要増に対応した製品供給力拡充に向けた設備投資を検討し、構造材以外の需要分野での商品開発も推進していく。

SSDプロジェクトは、素材生産から製材・加工、需要家直結型の製品販売という一貫通貫型で産地と市場を直結させた新しい事業モデルだ。特に梁・桁材は、同地区で伐期を迎えた末口40%を超え、大径木の有効活用を目的し、丸太熱処理を前工程とした芯去りKD平角を開発、機械等級区分構造用製材でJAS格付けされた梁・桁材を供給する。

SSDプロジェクトの杉梁・桁材は、大径木を伐採後、初めに木材のみの選別出荷にも

対応する。

平角取得後の側材も乾燥が進んでおり、無節の付加価値製品として出荷する。越井木材工業（大阪市）と連携して側材を活用した球磨杉SSDサーモサイディングを商品化し、高耐久ムク外装材として供給する。同様に造作材メーカーと連携、システム階段、幅木、回縁、枠材、サーモサイディング、サーモデッキ、建具などもOEM商品

化している。

「高効率芯去り平角は干割れが軽減され、KD後に仕上げ加工するため寸法精度が高い。元木大径木を原料とし、無節の平角採取ができ化粧梁にも適している。機械等級により構造設計面でも対応しやすい」（同プロジェクト）と語る。

紅中では同材を使用し、既に累計約20棟の木造新築住宅を手掛けているが、新たに地場有力ビルダーと標準採用に向けて検討を進めている。「JAS機械等級区分構造用製材に対するビルダーの関心は高く、国産材構造材で構造計算でき、長期優良住宅で差別化を図ろうとしている取り組みが増えつつある」（同）と語る。

建築物でも積極的に提案営業を進めている。現在、延べ床面積874平方メートルの木造多機能型事業所「桜の園（福祉施設、守口市）」を建設中だ。引き続き、公共、民間双方で非住宅木造建築分野でも提案を強化していく。

2015年10月9日
日刊木材新聞